

2017年12月

現代の若者は、なぜ非認知能力を身につけられないのか ～その要因分析と社会環境の変化を中心に～

経営学部 経営学科 新井ゼミ
B4R11175 溝呂木輝正

【卒業論文概要】

非認知的能力とは、目標に向かい努力する力、他の人と上手に関わる力、感情をコントロールする力などである。数がわかる、字が書けるなど、IQなどで測れる力を「認知的能力」と呼ぶ一方で、IQなどで測れない内面の力を「非認知的能力」と呼んでいる。また、非認知能力を身につけていれば必ずしも人生が成功するわけではなく、 $+ \alpha$ が必要となる。その $+ \alpha$ とはGRIT（グリット）と呼ばれる、やり抜く力が不可欠である。

本論文では、遠藤俊彦（2017）の「非認知的（社会情緒的）能力の発達と科学的検討手法についての研究に関する報告書」を先行研究とし、現代の若者の多くが非認知能力を身につけることができなかつたと仮説を立て、その要因を家族構成やそれに伴う家庭環境、さらには社会環境の変化に伴った家族のありかたが、非認知能力を養うのに適しているのかを明らかにするために、現代社会と農業社会の家族構成及び、家庭内環境の違いに焦点を当て、社会環境の変化を中心に要因分析をしていくことを目的とする。

アンケートや、農業社会と現代社会の時代背景に伴う家族構成の比較分析の結果、社会環境の変化は近代化が進むにつれ、従来の家族の中で果たされていた機能は専門的機関社会に譲渡され、家族の機能が縮小したことが一つの要因である。また、農業社会の頃は家族の中で自給自足を行い、そこで生まれた子どもは跡取りや跡継ぎとして家督を継ぐための役割と共に労働力としても必要とされていた。家族とは消費の場であると同時に生産の場でもあったのだ。しかし、現代の生産の場は家族ではなく社会となり、生産の機能は失われ消費のみの場となってしまった。生産の場が社会となったことで家族内での労働力も必要なくなったため家族を構成する人数も減った。現代の家庭環境とは、家制度よりも愛情にも基づいて形成されている。家族構成員が減り、核家族となり夫婦が中心となって、人間的に必要な愛情や心の安らぎを満たす場となった。これが二つ目の要因である。その結果、農業社会時代の若者は家督や跡継ぎのために育てられ、様々な教養や非認知能力を身につけることができたが、現代社会では家督や跡継ぎは自由となり、現代の若者の多くは核家族化や一人親家庭、兄弟がいない子どもの増加に伴い、独りの時間が増えた子どもはインターネットの普及によりコミュニケーション能力の低下や他者とのかかわる時間の減少によって、身につけるべき教養や非認知能力が身につけることが困難であると明らかになった。

上記のことを踏まえ、現在の核家族形態による両親や祖父母と関わる時間の減少や共働き、一人親家庭の子どもが親と関わる時間の減少を改善することを課題として提示する。